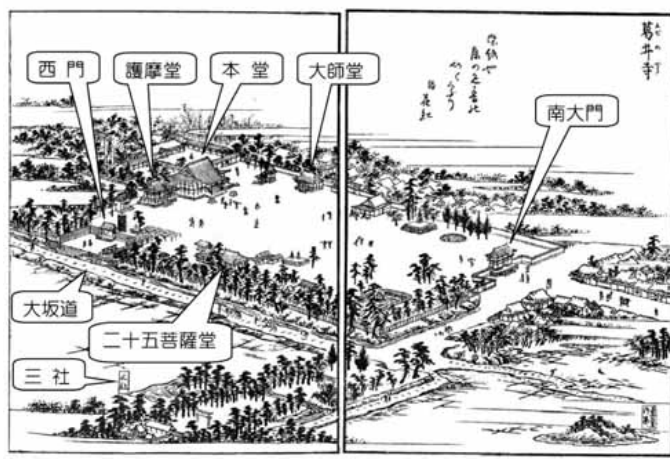


8. 河内名所図会を訪ねて その二 葛井寺



葛井寺は西国三十三所観音霊場の五番札所として、平日でも多くの参拝者が訪れる古刹です。聖武天皇の勅願による建立、阿保親王の再建と『葛井寺勧進帳』(1510)は伝えますが、歴史的には渡来系氏族である葛井氏が8世紀に建てた氏寺と考えられています。本尊の国宝・千手観音菩薩坐像は、脱活乾漆造りという奈良時代に盛行した技法で造られており、端正な顔つき、伸びやかな肢体と衣の表現は天平彫刻の最高傑作の一つとされます。一般的な千手観音像は42本の手で千手を表しますが、実際に1000本以上の手を持つ本像は数が少なく貴重な仏さまです。



『河内名所図会』に描かれた境内を見ると、南大門と本堂を南北の中心軸に置いて護摩堂、二十五菩薩堂、大師堂などが境内を取り囲んでいます。本堂は江戸中期の延享元年(1744)から30年近くかけて再建され、諸堂の多くも前後して建てられました。戦国時代の戦禍や地震によって荒廃していたのです。葛井寺で最も古い建築物は豊臣秀頼が寄進した西門で、重要文化財に指定されています。



『葛井寺参詣曼荼羅』は室町時代の境内を描いた貴重な資料です。西門脇の掲示板に説明があるので、お参りの際はご覧下さい。本堂手前の左右に三重塔、さらに中門と南大門が描かれていて、薬師寺式の伽藍配置を持っていたことが分かります。本堂前の灯籠は紫雲石灯籠でしょうか。西国巡礼中興の祖とされる花山法皇が巡拝されたとき、紫雲が本尊の眉間から灯籠までたな引いた故事が命名の由来とされます。その折に詠まれた「参るより 頼みをかくる 葛井寺 花のうてなに 紫の雲」は御詠歌となりました。なお、本物は本堂裏の庭に移設、保存されて、現在、境内にある紫雲石灯籠は複製品です。

『河内名所図会』に戻ると、西門に面した道が大坂道です。天王寺から古市までを結び、途中、平野、藤井寺、誉田を通ります。江戸時代の俳人・小林一茶は寛政7年(1795)に河内を訪れましたが、『西国紀行』の内容から大坂道を歩いたと思われます。葛井寺を詠んだ句は「藤咲くや 順礼の声 鳥の声」。

絵図左下に「三社」とある神社は、現在の辛國神社です。次回は辛國神社を紹介します。
(2019年4月 古川)

(参照)

秋山藩島編、丹羽桃溪画、堀口康生校訂『河内名所圖會』
(1975年 柳原書店)
『藤井寺市史』(1、2、7、10巻、各説編)
「西国紀行」『古典俳文学大系 15』(1975年 集英社)